

コロナを越えて～ Beyond COVID-19

インタビュー⑤4



「一般に売られている医薬品が救世主になり得る」と話す坂上社長

400 年続く伝統薬「樋屋奇応丸」

子育て支え、幸せ祈る

樋屋製薬社長兼COO 坂上聡太さん

「ヒヤ、ヒヤ、ヒヤの、ひや・きおーがん」のテレビCMでおなじみの「樋屋奇応丸」は、江戸時代から400年以上続くロングセラーの飲み薬だ。赤ちゃんから小児までの食欲不振、夜泣き、かんむし、神経質（イライラ）などに効果があると言われる。大阪・天満の地で歴史を刻んできた樋屋製薬（大阪市北区）の16代目社長兼COOに昨年9月に就任した坂上聡太さん（38）は「少子高齢化、医療費増加も待ったなし。今が転換期」とかじ取りに汗を流す。

（松村一雄）

困っている人に届けたい

— 歴史の重みがプレッシャーになっていませんか。 —
「プレッシャーは確かにあるが、昔とは状況と環境が違う。13代目が大成功したが、その時代は第2次ベビーブームで子育ての意識も高かった。今は少子高齢化の真ただ中で、昔と同じことをやっても失敗する。何ができるのか、何をしないといけないのか、何をしないといけないのかを新しい頭で考えている」

— 情報の伝達が昔とは大きく違います。 —
「ひと昔前はテレビCMで情報を得るのが当たり前だったが、今は会員制交流サイト（SNS）が中心の時代。核家族化も進んでいる。昔と同じ方法では届かない」



赤ちゃんから大人まで飲むことができる「特撰金粒 樋屋奇応丸」（リスク区分：第2類医薬品）

— その世代にどのように伝えていくのが効果的でしょうか。 —
「今は樋屋奇応丸を知らない世代に突入している。『初めまして』のつもりで説明している。樋屋奇応丸を知っている人にも、それが夜泣きの薬だということを知ってほしい」

市販薬はライフライン

— 自分の健康は自分で守る時代です。 —
「『飯を食べてよく寝ること』が一番体に良いはずなのに、意外とそれが忘れられていて、体調が悪くなると病院に行つて薬を処方してもらう。その薬を飲んで治った気になるけれど、体には相当負担がかかる」

「体調が悪くなりそうだなと感じる前に、自分の体をケアすることが重要。受診率が高いと、適切な治療を受けなければならぬ人がすぐ病院で治療できないというリスクが大きくなる」



1930（昭和5）年頃の出荷の様子

海外にも目を向ける

— 現代社会では、子育て中のお母さんの心も疲弊しています。 —
「8月に子育て層へ樋屋奇応丸の認知度調査をしたところ、数値は上昇していた。新しいアプローチに変えたことで、着実に困りの方へ情報は伝えられるようになってきている。子育て中のお母さんには、コップの水がこぼれそうなのほどストレスを抱えている方もいらっしゃる。育児中の自殺率も高止まりしている。そういう人たちに、気休めでもいいので使ってもらいたい」

「400年の歴史にこれから積み重ねるものがあるとすれば、何でしょうか。 — 誰もが樋屋奇応丸を知っている状況にしたい。それが日本の子育てのためになるだろうし、そうなることで幸せな育児が実現できる世の中になると考えている。まずは自分がふれずにそこまで行けるか、そう遠くはないと思っているし、すでに走り出している」

「海外にも目を向けていて、台湾、マカオ、香港をより充実させていきたいし、東南アジアにも進出したい。それができれば少子化をカバーできる売り上げを確保できるだろう。16代目なので、過去15人いる中で最高の売り上げを出したい」

神頼みと薬はセット

— 薬と神社の結びつきは強いですね。 —
「昔から神頼みは薬とセットだった。神様に『助けてください』とお願ひする。その神社の近くに薬を処方する店があり、買つて帰る。そういう面で、薬は昔から神社とは切っても切れない縁がある」

— 樋屋奇応丸には、大阪天満宮との縁もあります。 —
「昔は大阪天満宮に安産祈願へお参りした帰りに、子どもが生まれた後は元気に育つてほしいという思いで、お守りの代わりに『会社』の正面入り口前には、大阪天満宮の分社である樋屋製薬神社がある。神社は縁をつないでくれる場所。月に1度、大阪天満宮から来てもらつて月次祭を行っている。もちろん社内にもお参りさせていただいている。いつも、いつの時代も子どもたちの幸せを祈っている」



現在の樋屋製薬本社